

●事例紹介●

神戸大学の就職支援について

内田 正博

(神戸大学国際文化学部教授)

一 法人化後の神戸大学の就職支援

神戸大学の就職支援は、法人化に際して、たとえば今年四月にキャリアセンターを立ち上げた北海道大学のように大変身を遂げたとはいえないが、それでも以前に比べればかなり変わった。

なかでも最も大きな変化は、就職担当部署の刷新である。昨年度前半までは、学務部学生生活課(旧厚生課)の中に就職担当の職員が一人いただけだったが、年度後半から二名になり、今年度から同課の中に新たに「就職支援室」が設置され、専任職員は三名に増員された。なお、その他に

四名の就職相談員が、以前から日替わりで学生の相談に応じている。

就職支援室の発足にともない、就職支援室主催の行事が増加し、種類も多様化したうえ開催時期も早期化した。四月から九月までの今年度前半だけで、法人化直後の四月三日に新入生就職ガイダンス、五月下旬三回生向けガイダンス、六月インターンシップガイダンス、同月下旬生対象キャリアガイダンス等、今年度前半だけで計六回の行事を開催し、二〇〇四年度全体の就職支援室主催の行事数は二〇回にのぼる。またインターンシップの取り扱い数や就職相談の数も昨年に比べて倍増している。

学部単位の就職支援については、以前から発達科学部、

国際文化学部および海事科学部には就職委員会があったが、昨年度就職担当の委員会を設置した文学部に加えて、今年度から理学部が就職委員会を発足させ、文系だけでなく理学学部においても就職支援が活発になった。もともと、

一一学部を擁する神戸大学のすべての学部には就職委員会があるわけではない。

また今年四月には「神戸大学東京オフィス開設準備室」が新たに設置され、職員二名が神戸大学の広報および情報収集を行い、さらに東京で就職活動をする学生の就職相談にも応じている。

以上の他に、就職支援に対する各学部の同窓会の積極的な姿勢も挙げなければならない。じじつ、理学部同窓会はずでに昨年度から後輩の就職支援のために動き始め、また東京オフィスは同窓会の一つ「凌霄会」東京支部の一角をお借りしたものであり、学内の就職支援団体の中には工学部同窓会からサポートを受けながら行事開催を行っているところもある。天野郁夫氏は卒業生をも視野に入れた大学の

特集・就職

の共同体性を指摘されているが、国立大学にとつても、教育、就職支援、財政など様々な面で豊富なヒューマンリソースを有する同窓会や卒業生の役割は、今後ますます重要

なものとなってくるだろう。

二 神戸大学キャリアサポートネットワーク

神戸大学キャリアサポートネットワークとは、二〇〇二年の秋、学生による就職活動支援組織「神戸大学job-navi」の誕生を契機として結成された神戸大学の各就職支援団体の連携組織である。このネットワークは、メーリングリスでの意見交換や情報の共有、チラシ配布など各イベントの相互宣伝、ホームページ上での他団体の行事紹介、また時折、顔を合わせての意見交換の機会をもつなど、ネットワークとして比較的有効に機能している。ただし、ここには窓口もなければ代表もない。組織としての形式をとくに問題にしないユニークなボランティア組織であり運動体といつてよい。

発足当時は細々と始まったネットワークだったが、現在ではいくつかの学部委員会や各同窓会なども加わり、かなりメンバーが増えた。ここには、神戸大学の就職支援組織とこれらと連携する内外の組織が加わっている。神戸大学学務部「就職支援室」(専任職員二名と就職相談員)、学部

の就職関係委員会（発達科学部、文学部、理学部、国際文学部、海事科学部）、学生による就職活動支援組織「Job-navi」、経営学部ゼミ幹事会議、神戸大学生協就職支援プロジェクト、（株）神戸学術事業会、神戸大学東京オフィス開設準備室、凌霄会、KTC（神戸大学工学振興会）、紫陽会等の各同窓会、付属明石小学校、また学外のリクルート、デイスコ、毎日コミュニケーションズの各神戸大学担当者、キャリアデザインの特門家である伊集院正氏や鈴木美伸氏などが、そのメンバーとなっている。

メンバーの顔ぶれをご覧いただくと分かるが、その立場や組織の性格も千差万別、しかし、そうした各メンバーが一致して抱えている思いが、神戸大学の学生、ひいては日本の将来を担う若者の就職支援のために連携しようということなのである。

このネットワークでは、就職支援の目的を、日本や世界の将来のために志のある有為な若者を社会に送り出すことと捉えている。大学教育との関係でいえば、大学教育充実の延長上に就職支援の成果があり、あるいは就職支援の強化は大学教育の充実のためと考え、就職支援は教育とリンクしているという基本的な理念が共有されているの

である。

このネットワークの中には、原則として組織上の階層区分や上下関係はとくにない。教員と職員と学生と学外メンバーの関係を含め、メンバーはそれぞれの立場や枠を超えて緩やかな連携を保ち、互いに補完性の原則とパートナーシップによって結ばれている。

このネットワークができたことにより、時にはキャリアや就職支援について自由に考えを述べ合いながら、互いに情報を交換・共有してイベントの日程調整や学生へのイベント情報の提供を行い、さらに各組織が相互に補完的な関係にあることを認識して、それぞれの特長を生かした行事企画等を行うことができるようになった。

ネットワーク誕生によって、就職行事数も飛躍的に増大した。誕生翌年の二〇〇三年度は、神戸大学の就職支援にとつて劇的な変貌を遂げた年となり、学内の就職関連行事の総数は約一三〇回以上におよんだ。ただし、この中には二月下旬に一回で一二企業、それを計五日間行った大規模な企業説明会（学生生活課主催）なども含まれているので、実質的にはこれより多いといつてよい。昨年のピークは一月と一二月で、両月ともそれぞれ一か月に二六回の行事

数を数えたが、それは、土日を除けば、神戸大学の学内で毎日一回以上の行事が開催されていたことになる。そのような状況を、その過密な行事数ゆえに「イベントの乱立状態」と呼ぶメンバーもいたほどである。

ところで、ネットワーク誕生とともにメンバーに加わった神戸大学生協の活躍にも一言触れておかなばならない。神戸大学の就職支援環境に対する生協の貢献はきわめて多岐にわたる。学内の就職行事案内を掲載した就職情報紙「Future」を発行するとともに、ホームページでも全就職行事予定を発信しているが、そうした広報活動だけにとどまらず、少人数セミナーや企業見学会をはじめとして各種イベントを自ら主催するほか、さらに他団体の行事の企画や実施に積極的に協力するなど、いまやネットワークにあって欠かせぬ存在といつてよい。

また前述の「神戸大学Job-navi」とは、二〇〇二年の秋に発足した学生による就職活動支援組織である。当時、神戸大学の就職支援団体といえば、学生生活課、発達科学部、国際文化学部、経営学部ゼミ幹事会議ぐらいのもので、それらが相互に連絡をとらぬまま、それぞれが就職行事を開催していた。そういった状況の中にJob-naviが誕生し、そ

のホームページに各団体の全行事予定を掲載するとともに、自らも活発に就職行事の開催に取り組んだのである。発足した二〇〇二年の一月から年度末までの年度後半だけで、第一期Job-naviは計二六回の行事を開催した。今年度は三期目を迎えている。

神戸大学キャリアサポートネットワークの隠れたモットーは、某ビル会社の宣伝コピーをもじつて「すべては学生の就職支援のために」というものである。立場の異なるメンバー同士が、たとえ個々の組織が微力であっても、補完性の原理によってそれぞれの持ち味を生かしながら連携し、そうすることによって、ネットワーク全体としてはそれなりの仕事ができるかもしれないと考え、これまでは就職支援に熱心とはいえず学生にとって不親切と言われてきた国立大学の就職支援状況を、こうした試みによって何とか変えていこうとして生まれた組織だったのである。

三 国際文化学部の就職支援について

最後に、筆者が所属する国際文化学部の就職支援について触れてみたい。国際文化学部の下級生の中には、就職に

関して国際文化学部は他の既存の伝統的な学部比べて就職に不利だと思っている者がかなり多い。だがそういった先入観に反して、高い志と社会貢献への意欲をもった国際文化学部の学生たちの就職内定率はきわめて高いのである。一昨年三月卒業者の就職内定率は九七・二%、昨年九八%、そして今年三月の就職内定率は一〇〇%に達し、神戸大学全学部の中でも、ここ数年間は例年トップと云ってよい位置を占めている。

このような成果を生んだ要因はいくつか考えられるが、まず第一に挙げなければならないのは、国際文化学部の学生が非常に優秀だということである。第二に挙げられるのは、文化の多様性への眼差しと多文化共生へのコミュニケーション・シオンを重視し、「異文化理解」と「活動する知性」の育成を図る国際文化学部の教育である。その教育と就職活動の関連について、一人の学生の声を借りて紹介してみよう。

「現在、企業は物事を様々な視点から捉え、新たな発想と価値観を創造できる学生を求めています。その点で、企業にとって国際文化学部生は正に最適な人材ではないでしょうか。大学で学ぶべきことは『考え方』であって、知識は

それに伴うものです。幸いなことに国際文化学部では、少人数制のゼミなど、素晴らしい学習環境が整っていて、私はそれらの機会を活用できました。そして、ゼミなどを通して得た『考え方』は、就職活動でも大いに役立ちました。筆記試験や面接の対策といったテクニクも大切ですが、自分の意見をしっかり主張し、他人を納得させる事ができれば基本的にそれで十分です。」

これは、国際文化学部の就職関連行事の一つとして実施している「就職活動体験発表会」で、内定者の一人が後輩たちに語ってくれた言葉である。ちなみに、文中の「企業」は「社会」と置き換えることもできる。就職者のうち例年一割以上を占める公務員合格者も、国際文化学部が公務員という進路にも決して不利ではないことを後輩たちに自信をもって語ってくれる。

そして第三の要因は、そうした就職支援行事の開催を含め、国際文化学部が行う種々の就職支援活動である。国際文化学部は就職活動を広い意味での教育の一環と見なし、国立大学の一学部としてはめずらしく就職進路支援を重視している。一九九四年に発足した就職支援を担当する委員会組織、エクステンションセンター（略称EC）は、その

主な業務として、①就職関連行事の企画・実施、②就職関連情報・資料を配置したECルームの管理およびホームページの運営、③一一講座から選出された委員による自講座の学生の進路・就職状況の逐次把握および教授会への報告などを行っている。

国際文化学部ECの就職関連行事は、JICA講演会や国連職員講演会等のような広く社会への関心を喚起する意識醸成のための「特別講演会」、主に三回生や修士一回生を対象とする「就職ガイダンス」、国文生の就職活動のDNAを語り継ぐ前述の「就職活動体験発表会」、そして実際に社会で働いている卒業生が現場の仕事語る「職場体験報告会」などで、近年はこれらを年間合計二〇回弱実施している。

とりわけ「就職活動体験発表会」は、これを聞く就活前の学生にとっては、就職活動の厳しさと同時に国文生として就職活動に臨む心構えなどを知ることができ、また教員にとっても、就職活動を通じて学生が人間的にたくましく成長することや教育と就職活動の関連を具体的に知る貴重な機会なのである。

少子化に向かう社会や現在の若者の就業意識の希薄化と

いった、かつてない時代の到来の中で、大学もまた自らの使命の一つとして日本や世界の将来を担う有為な人材の育成ということを念頭におくならば、入口の入試と同様、進路選択や就職に対する出口でのサポートもきわめて重要な課題として受けとめるべきである。優秀な学生を探るために学部単位で入試業務を行っているように、その学生を有為な人材として社会に送り出すためには、学部とその教授会は、自分たちに委ねられている学生の進路選択や就職に対しても十分な関心をもつことが求められる。

学部の教員組織である就職委員会があれば、学生一人一人に対する進路ないし内定状況の綿密な把握や、教員に対してそういった詳細なデータを教授会で報告することも可能になる。事実、国際文化学部では、各講座のEC委員を通じて全指導教員に自分の指導生の進路把握を依頼しているが、その際学生との間に生ずるコミュニケーションは、学生に対する就職支援のみならず生活指導の役割をも果たすことになった。国際文化学部ECは、その目標の一つに進路・就職先不明者を出さないということを挙げているが、ここ数年は毎年その目標を達成している。そのような趣旨を理解し、昨年などは家庭訪問までしてくれた指導教

特集・就職

員がいたほどである。

また、国際文化学部では例年五月ないし六月から講座ごとの内定状況を毎月の教授会で報告することを慣例として
いるが、このような報告を通して、国際文化学部の教員は、
学部ないし自講座の就職状況におのずと関心を払うようになり、
しだいに学生の就職活動にも理解を示してもらえようになった。

このようにきめこまやかな対応やケアを可能にする学部の
就職支援組織と進路就職に関する専門的な知識や種々の
情報を提供する全学的なセンターとの効果的な連携があつ
てはじめて、大学の就職・進路支援は、学生の自立と社会
的関心を促し、学生にとって納得のいく成果をあげること
ができるといえよう。神戸大学にも本格的なキャリアセン
ターの設置が望まれるところである。

【参考】

神戸大学 <http://www.kobe-u.ac.jp/>

神戸大学生協 <http://seagull.coop.kobe-u.ac.jp/recruit/>

(神大各団体の行事予定は「CALENDAR」)

神戸大学 job-navi (神大生による就職活動支援組織)

<http://home.kobe-u.com/jn-web/>

発達科学部のホームページ <http://www.h.kobe-u.ac.jp/>

(就職関連は「インターンシップ・就職活動」)

国際文化学部ECのホームページ

<http://ccs.cla.kobe-u.ac.jp/committee/EC/>